



株式会社博報堂顧問

(沖縄開発庁元総務局長)

玉城 一夫

沖縄開発庁総務局長を辞して早や半年が過ぎました。三十二年余の公務員生活の中で沖縄開発庁にはその前身を含め十三年間勤務しました。特に総合事務局には、私自身沖縄出身ということもあって、総務部調査企画課長、総務部長、事務局長として都合三回、延べ八年間務めました。その間事務局の皆さんには大変お世話になり、心から感謝を申し上げます。

「沖縄在勤の思い出は三回の勤務を通して数多くありますが、それぞれの時代に強く印象に残ったことを中心に振り返ってみたいと思います。

総務部調査企画課長時代は昭和五十五年から五十七年までの二年間、最初の沖縄振興開発計画に続く、いわゆる二次振計をどのように「ヤサンするか」ということで、事務局各部が

沖縄在勤の思い出

げての取り組みのまとめ役として、また、県と本庁との橋渡し役としてフル回転していたのが思い出されます。各部とも大変に意欲的で皆燃えていたという感じでした。また、当時は香ニゲーションも盛んで県の担当者とも建前論ばかりでなく、本音で意見交換ができたと思います。しかし、昨今はいろいろあつて…

もう一つは戦後補償の問題で講和後から復帰前までの米軍人・軍属による県民に対する人身被害事案(多くは交通事故、他に暴行や殺人など)について個別に審査し、補償額を決定する事務がありました。担当者が深夜まで一件一件調べて積み上げたところ予算のほぼ倍に当たる件数・金額になりました。沖縄の戦後の一つの断面を見たように思いました。

昭和六十二年から平成二年までの総務部長時代には着任早々海邦国体が開催されました。印象深かったのは開会式を飾った沖縄ならではの「スグム、四つ竹踊り、エイサー、綱引き、空手演武」などが沖縄市のメイン会場いっぱいに繰り広げられました。



実に壮観でこの面では四十七分の一の県としての沖縄というよりも、四十六ともう一つのもの、本土全体に對置する存在としての沖縄という感じが、県出身者として誇らしく思つた次第。また、夏の大会の時に二十世紀最後の金環食があり、職員の人かと一緒に庁舎屋上で見ましたが、神秘といつか実に感動深いものでした。

現在、群星荘は職員の研修の場として、また夏場を中心に職員・家族の保養の場として活用されていますが、その当時は北部国道事務所管轄の残土置き場にすぎず、ススキが茂り、ハフの棲み家でしかなかったところ。いろんな経緯を経て建設されたフル付きの瀟洒な群星荘を見ると、井戸掘りをした一人として感慨深いものがあります。

事務局長時代は平成六年七月から九年七月までの三年間。この時期は米軍提供施設の延長問題を巡って国と県(大田県政)との相克の激しいと

きでした。特にあの不幸な少女暴行事件を契機に沖縄の米軍基地問題が大きくクロースアップされ、沖縄担当大臣が置かれるなど政府を挙げて対処することになりました。振興開発業務が中心の事務局においても、その後基地跡地の利用の問題はかりでなく、基地周辺問題にも関わるようになってきたことに時代の流れを感じさせられたように思います。

事務局長時代に頭を離れなかったのは合同庁舎の問題でした。現庁舎は狭隘で老朽化も激しく、合同庁舎の建設は将に喫緊の課題でした。財務部や営繕の関係者と早期の建設方法を巡ってよく議論し、本庁や大蔵省理財局、建設省営繕部へも何度か足を運んだものです。用地については既に財務部において手当て済みでしたが、肝心の建設予算についてはバブル崩壊後の特許会計の厳しい状況や営繕予算もその多くが大宮市に移転建設される合同庁舎に回されていた当時の状況下では、ない袖は振れぬ」といつ辛い結果になってしまいました。それでも地質調査費を計上するなど着実に積み上げてきた努力が実り、いよいよ建設が始まるとのこと、喜びに堪えません。

二十一世紀の幕開けに当たり、事務局の皆さんが新装なった庁舎において二層のご活躍をされるよう祈念申し上げます。

